夢想兵衛胡蝶物語前編

五

へ13
3096
5

門 へ 13
號 3096
卷 5

夢想兵衛胡蝶物語巻之五

東都　曲亭馬琴戯編

貪婪國

貪婪國より魚あり。その名を饞といふ。饞の大慾。義万八万の欲ありとぞ。化して鳥となる。その名を恪鷃といふ。鷃の慾面厚さ三千枚。そして飛んでその喙。垂涎の嘻のごとし。この鳥や開運と月醉醒より至りんとて。醉醒八強欲の山あり。吝嗇三千畏。上ゝ搏して。貪ること九万鷹貸小六ヶ月をもつて限とす。野夫や甚六や。文盲の息をもつて相吹くこと。天の蒸くるごとし。それ天竺邪。その遠しそ。至り極る所なりん邪。下ること木仏の如し。と樂屋へ落ちと莊子の故事附。逍遥遊よりねども。如く勇気のあるものでも。彼大鳥より絶きて人。生ずる仏ちなどもさくも

昭和九年
七月二四日
購求

夢想兵衛は醉醒山の住人なり。貪婪國の大悪人。恪鶏は撥去はし
ぶ。ふるれば小人島の同行小吳のごとくにて。雲を霞と
飛び行よその怖さ若しさ。驚くべきものなり。紙老時は祭て國を直し
誠云いさとなるものなりて。その命ありて受ばかりも今さらふ。異
國へひとり旅されば。住てこまる。傑屋の太郎どもはまさに最情といて
気のちぶ山中左衛門殿。寔よ三寸息絶まべ。萬る休と。旅魂今
夜誰が家ふ。訪らんと。ちかくに。衰まるる。めり。行よ吝鶏は。夢想兵衛
を。祀しまる。海上三千餘里を。行を。只一伸ふ。飛ぶ。貪婪國の吝嗇郎。宇浅
城といふ都の。元ひとり。翔ざる。阿太次計梨の木の股へ。ぐさりとうちおろせ
ば。夢想兵衛は息絶て。ちぐ生死はちりざるる。ちろれども。悪名物惜
紙ぶ。癖のまゝ。ばぐ格別よ。接も。減らねよ。ちのまろ物をむざくと。喰て

ちまふは。情へりめく。是はこのまく。ちまふてあるへ。といまぐ。脳をもつけ。ビて。赤
揮イ。ふと。飛去ぬ。ちぐ。ぐ。夢想兵衛は半晌のまりて。息吹長。
さそへいまぐ死ざるる。のるれ。ぐ。高き。樹よ。ぐ。をちけば。木
佛ひ。ぐん。ぐもなく。十方ふ。ぐ。とるわ。ものれ。血長寺の慾海和尚。ぐん
寺は紋繻子の袈裟。被く。香深の法衣。殊。揚げふ。射利。ぐ。といふ。草寝
取。侵欲。といふ。ぐ。子坊を。借。ぐ。つ。木の下。ちく。過ぐ。ぐ。夢想兵衛は
ぐ。を。見。ぐ。地獄で。仏と。大。ぐふ。飲び。掌。ぐ。ぐ。声。を。揚。喃く。聖。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。は。月。ぐ。國。の。旅人。ぐ。夢想兵衛といふ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
國。ぐ。慾國。を。徧歴。近。屬。強。飲國。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。死。ぐ。
眼視。衆生の。背。ぐ。

情を入めげ。さそくそれハ気の毒千万。残ふぐるるエるらべ。人を校へハ出家の役なり。冥加銭の弄少よろつて相応よろべべ。拙僧甚途をいそぐ。毎〻直を限り。と慾ばるるて寛へべ。義太兵衛呆果さそもさそも貪婪とハ國ハ学よりそろてあそ病。人あハ木の端ハ仏のそれのやうふいろ〻出家さそ。人の雑徐を僥倖よ。そ和ける枝計口上慣さもあしとそくども。狼貪を悲の國風なれば。俗人ハ母ひやる。この和尚を早〻迯。後ふ勧解ともるげくとも。ろ〻ハ賂の早贄さるやうふ。日乾ふるるそもめじ。忻をふ手ろ。と出案。木の杪高く声ろめげ。寛ハ如義知ろ。某懐中ハ路張澤山所持いさべ。そろよ寄進さべ。と餘義ろくいべ。慾海和尚。ためて莞爾とちち笑をハ。ろ〻ろ〻。残ろ如衆生ハ度〻ぬ。仮既ハ賜の金ろ。赦ハべ〻。

と回答。懐ろ紙入ろ。豆箕盤を取出。ぢこの樹の高さが五六丈もあるべ。これへ掛る足代の杙九杙を。十本とえて。この代張が八十目。そそこの如き。運送の車力を。壱貫弐百文と。えつめて。外ふめ〻索十把。四百文。この人足を十人宛て。三貫文。これべこの入用が。張八十目と。残四貫六百文。ぢめ〻。これ〻今日有徳ろる檀方へ非時ハ吸ふて気ろるろ。殊さ〻一周忌の逮夜ろれば。食麦も格別のろるるん。ろろ〻欲ろ弛走をうけど。宝の山へ足踏ろけて。腹を空くさる損毛をざろと勘定てえきば。本据を五匁とえて。主従三人で十八匁。硯蓋も二面とえて。八匁ものへめるべ。毎〻吸物が三ツ。味噌吸物が二ツ。主従へ生〻吸物の数。三五十五碗を。三ろ積ろ。ろ〻四匁五分。取肴二ツ。薄殻二ツ。ろ〻を三匁積ろ。ろ〻上下とえれば。三八廿四匁。酒ハ一銚子。五合宛ろ。主従三人で十銚子

へ輙くはめべし。この酒五斗。一斗あるに銭百八拾文あり。さて賃四百十六
文引物の果子は寺分優婆塞二。茶優婆塞二。大雁一。羌瓜一。一人
まく七ツあり。三七二枚寺分。上包の粕入六枚で十八文。紅白の水引三把
で六文。さて他ちで飲食〜さくで。所回向さうと持仏へ對ひ宗旨の経
文些二だく。口のうちでうるさとおそ。されらく布施ゲ金百疋牛子の侵
慾へ張一両。往者の利双へ三百文。さを一ツ寺ゑ締て足さべ張七拾
銭ハ分。残る賃七百四十文。まぐめのく。ゆる結構なる檀那を麁略
あり。俄頃ゑ病気とエるりて。使僧をつれとふしそも。空ゆ〜ゆ
まぐ。この進物ゲ大枚原一束。春野香といふ。長線香十把。霊前へと
書て出ると。この入用ゲ大枚原一束で十匁。春野香十把で二百八十文。
上包の粕入水引ゲ三十二文。總高さ合て足さべ。百六十弐匁八分と。残六

貫六百五十六文。さを両ゑ六貫八百ゲえの金ゆて三両弐分弐朱と。
四百五十七文とるる。これいもん分を助いでも。これらゲ所得るれば。冥加金
あハめらば。人の命ハ千金ゆも買さぬりのるれど。これら出家のるるれば。
慾をさるのれて相続さべし。永代庫裏の菩提とて。只今五十両奇
進あるべし。さるとゑハ二口さめて。五十三両弐分弐朱と。四百五十七文ゆりゆ。
命と引替ゑ。この金残を遍与さるのらべ。扶さるさべし。鐵銭寺
文ゆり上面不足せば。仏縁ゆ〜と諦めく。足えをゆて宣へば。多拾兵
衛うち点所何がさて扶おしてゆるべ。五十両や。百両の金ハ惜らば。
かくさるゆり旅さてそれ。路張ハ懐ふあり。この外ゆ腰ゲ重くて苦ゆゲし
とうまい相談ふることハのらどさるべ只今手つけ金として。五六両受ゑ
べし。犬の糞のるハ知へ。そうくと投ゆ。いまでハあるねども。隨分切さの

貪欲
因名木
無分別
童名
ベカラン

胡蝶城
不一口
任如
大誠寺
くん和尚
ふぞろい
勝介

るゝ小判をこゝろのまゝにと宣へば。爰兵衛は吹もめくとそれは縁よ
疑ひふかし手はけを遍与はやとけまどもまぐ足代の丸枝もはんどのり
その令状うんさらつて。隨得寺く移轉されても。追とろうで枝よ栖む
猿が餅でもいやるとば。疑ひこちゝあもあり。殘ぐよあれば四海うみ兄弟
ぶんとゝ賢者の名言。條人とゝあまうとべー。といろまて冗る天窓
を搔さ。これは愚僧が生損ひ。ちろーとさくで受るべー。手を掴ーあまと
いさゝとこち。木枝樹の下ちあんとゝ。そのとゝ和尚背をはんろ何ゆう
私語のひつ。法衣の裳をとれこけて。白繻子の帯とれ捨のくが侵
欲坊も射利助も。めろとも帯を解さひとろよ繋ぎあつろ。爰兵
兵衛は樹の上ろ。何とるるぞと直下ば。三途の河越ーるぞ。侵
欲坊はそのまゝよ氏を衛とゝ和尚の股ぐ。とろくゝと立る肩車。輪

へひつとゝ牙をとられば。射利奴は結びめはせ。茅を紡ねて右ゆよ持。
師弟の接穂を階子ゆて。ゆゝ梢よ攀登る。ゆつとる茅を爰兵
兵衛ば。腰よちろと結び著。下の枝ろう繰おろば。和尚は足を抱
さとゆ。雖ろく扶ろーゆくば。射利奴は輪を抱て。ちるくゝとこちろ
ろる爲体猿よ翼を流ーる如ー。と爰兵兵衛は感心ーて。ためて吻と
息をつけば。主従手とゆく茅紙ちゆ。舍うけちろゆとゆを出せば爰兵
兵衛は些とも騒ぐ。足代をかけーとべ。今紙生をちんりのでゆるけれ
ど。何のゆもなく。ゆゝーゆくば。そどめの約束とは大ちろ相違。ちば
勘定をちうんて。といはせも果ぐ。慾海和尚はゆぐぐ。ふ脱ーろ歯をむき
牛ーいやくそれは凡夫の身猪手。一切債員ろくろれは足代をかけゆう
とも。かけぐとろ紙とまとゝ。そちふゆ手ゆとゝ。雲ば人を招待

て。夜ふ入りて物と死。駕賃とりて是を分とげむ紙。赤いと受納して。尻ひつかゝげ膝栗毛で。ひへつさ王が後よりおれても。駕賃うへせといふものめん。やさうとてふつゝぬ人出家を忻とと五百生まで。地獄で舌を抜くべし。やと威〳〵えんさう賺〳〵う。比喩方便申ら人乃いハせそもんて爰忠兵衛ハ呵をとうち笑ひ是代の母の代のと絶つれの人和尚の舌を抜れぬ用心ものくり。仏ハ慈悲を體とす。学怨をもつて教とを。妻子珍宝及王位臨命終時不隨者。唯戒布施不放逸者。今世後世為伴侶と大集経ふも説きるふ出家も残を用ゐがゝバ。何をもつて桑門とせん。些ハ恥とちうもへとげつそうりくバ怨悔和尚法衣の袖を掻合せ。さゝぶハ凡夫の俄ものゝ。仏の方便をもつぬよりも。大集経ふ説きしは。物をもとる檀方ふ布施をとゝもゝ善巧方便加之。光明経ふ乃至

得聞是経。當今是等。悉得猛利不可思議。大智恵聚。不可稱量福徳之報。なゝど説うけ。亦法華経普門品ふハ。若有女人。欲求男。礼拜供養觀世音菩薩便生福徳智恵男。設欲求女。便生端正有相女宿植德本。衆人愛敬。と説ひて。慾〳〵引こむ成仏道塞。銭を投つけゝまて。腹とちもふ佛ハ。仏も金を欲ゞうもへバ。黄金とりつて。ハ賣と。泥ちゝとをもゝるを。地獄の制度も金次第。十王が勧進ふ。ゝふが為とハ衆生の常言。般若貳朱ゝが銭をもつて。いちゝ真讀の施主ふハつゝ。汝鞍の跡狼ゝといひしハ偽ふそ。懐ふ物ゝ。今の一句ふ推量と。冥土黄泉ふも奪衣婆ふ。銭ふ死亡者ハこゝよ剥る。懐搜して物ゝハ。九もれふして後を笑ん。

者奴逃るなり。といひもはなはだ。公はうと左右うちを見を多
鏑ふりるうれめの旅烏羽を動きぬ羽ばたき。鳥肩しうし赤裸
合羽六十ちさ長まで。まろめて常りてまろうと拵る。妻勢は子勢
は生さんとぞ。ゆうせくも聽ばそ。野太い奴はかり合。犬骨折てまろうの
ちまるこるこのまろ物と百貫の。肩よりげる古脇袍ねうふめぬと主
後ば。立蹴は礙と蹴る足も改へもぐ田畦道。横筋遠は走まうぬ。
悲なる爲武兵衛は。焼鳥禪ひとうの瘦骸坊主が憎げや今朝
まぐもるる布子の長くて。何処へもうん入。搾場で。猫の魅邑死人
のエくこうろくと立ち居ろう。西も東も定らるねばひとう相撲は
ろの角ろうんどげふ世の人のもうひぐさ。乞食ろうるもの。恨し
さふは向上もべ。ろの樹のくうち易常ろうば。猿滑み仇て木の層冗て

茶灌を延るぐ。葉は一文残み仇て生仇を剥ずぐ。果の形
西拉紀の。人参果の併ありてべろ。ろうろうをるぐど。宮はろの樹を阿
太次計梨と。名つけるもエうろう。ろる國でも都あ。情あれ人
るうくぐもんとろんだろうをあまく。字綫城へとくろもく。抑都の
形勢は町條奇麗みて。庫造は格子をうつげ。或は櫻桐林は居宅
を構へ。或は硝子の長簾をくげうど。背門で采春杵の舂車井戸
の轔る音。昼の鞳析は。仮とれを。ろうせ。夜の桿棒は枕元イ
ぐくせ。壁は掛る用心草鞋は。大人國の串柿のぐく。樣ふ活ま
霖雨の番傘は。半夏過の竹の子ろう長く。綫はあまども注ぐは
て生蛭股引穿づめふ。主人も小厮ようちまぐ。主役竹の皮履穿く。
木の皮で傍をうく。挽煙艸入は紙ろうでかげ。煙草は一玉六十四文青臭く

のを最上とし。魚は塩物乾物を賞誠とと。朔日十五日の外は食ず。
飯は黒きを厭はず。汁は蕪を紙厭ひど。朝は[illegible]より起て竈の下
のせとゝろで炊。夜は遅く寐て犬の声を耳を側て入るを欲で生るを長
き。不如意の親類へは。年始は門札で。敬して遠ざけ。長屋の客将ま
ぬゝんとなる。えんるゝんるゝお茶漬でもといの。勘定づくでもつ女房。
一騎當千よりてまわり。在々の侍子。田畑流さゝを名蹟と定め。
有明をおろどして。換るふ定香盤をりつ匕。牙の膏を絞りて。机の先
ふ火をとり。半枚の附木を横て。燧を鑽て草履をえせ。懇意
づくでも。唯は通さど。國中の男女母の胎内よりあるを。四十年みく
たゞめて生き。六七十を一期とそれば。ぴゞもきれて。少きも年老
たく。只吝嗇を夏とて。利の爲は煩悩やむとれる。愛表兵衛は

たれゝの形勢ふ脇ゝびに示まゝく。門よりゝ袖よつけども。慈悲善根と
いはゝ沢ちゝね國るれば。一艇の手の内にるるものもなく。飢疲きく。今は一歩も
運びがけまゝび南をうける十字衢よ。大きなる家造の窓の下よ立在ば
むゝゝゝ赤ゝ岩垂阿爺。七ゝさゝの絹羽織せゝ小紋の肩衣。臥の霜
は備前陶を灰よゝぐる併あり。洗ひさゝしの松坂袴よ。木綿小倉の二重
羽。曲り形る古雪踏も。かねは減らゝ歯ゝ。左手よ松魚引提
て。右手ふ持る一把の薪を。町中へ撲地とおれよりるは物を笑ゝと。三十二
文の損をとる長ゝしゝとひとり言ゝて。松魚を薪の上よ載せる母ゝどゝと
呼ゝゝ捨よ来ゝる。と爰表兵衛は。呼ゝけ見ば眼もまるゝ。貪婪國ふも
又なる。気ちがひはゝりるゝよ。堅木の薪を一把そえて。生さゝりる松魚を
捨ゝゝ。さゝとて解せぬ奴故ゝとあゝめ。哀ゝ泪ゝと。ゝよ深く怪をけり。

浩然に赤ひとり、六十あまりの隠居阿爺。天窓は薬罐と冗談やき。
腰は曲りて鍋の墓墨より黒き杉子顔吹竹程な杖の頭へ、ちつと掛
る古草鞋、さらくとして横町より。出合がしらに顔見合せ。これは薮坂
の吝平どの。ざらくお出と呼びかけしが。いやあれ佐堀の皺右衛門どの。
頃日は御ぶ沙汰いたしぬ。今日は知へ出かけし。撰ろくよのまゝて親類も
へ四五十金の媒いたし。つくはせうろ親類ずけに礼金なれども。慾でいるれて
並よろもかし餘斗に受納いたさせ。その謝礼として松魚一本贈り下
されて都屁な臭を煮て惣菜にするときは食せつけぬ魚類なり。
家内の奴原飯がさくまが一トくさの飯に損あり。又さし身にして自分一
人賞翫しても一本の松魚は食つくされぬ。それへ客でも来るとまた
まんさらそれともせても一ならぬ。これも又二三合の酒を損するとも

あるべし。所詮薪一把の損をして。その松魚を捨るにしかず。薪あれば
捨人ものは醤油一合の損なり。しかふべそのあぐる人もあるぐしと思案
しそのぞく捨に来ましたといへば。皺右衛門眉を顰め。嗚呼其振
はそれ程に大気な人とはおもいぶらず。さほど焼がまわりましたか。頃日の
相場では捨てても又百がものはあるふかのせぬさかなや。へ売りもせねとれ
毎日麦飯のみを食に。屁の出る限りなし。されどもそ屁もいたづら
に放らず。気をつけてよおとしえへ。紙袋へそつと詰して置きな
紙袋ふうと括り。ずいを青菰に代て置。常の風あたりなるで彼
袋の屁を畠へちらせば。自然と菌になる道理。古草履踏切て惰気
もなくなげをいる大気ものとは。日を閉して詰りがたし。ご覧あれぬ方
へまわし久るさふに拾ひよせる古草鞋。捨られる紙を撰りわけて残りへ

貰ふにきたるなり。かくその松魚を捨るなぞ。これら直なる拾人べしといへども頻に天窓を掻きつゝ行きしは。近年の大ばかり。元日から大晦日まで鰹ものを買ざれば。一向その人気がつかん。若いにとてゆきあたりばつたり小判朱の損をしらぬにさたぶは老功。感心く誘同道とうちつれて。薪と松魚を又引提げ。かへりしとも也せず立くれべ。夢想兵衛ハ爪弾して。ほくそ高く冷笑ひ。糠を搗りて米に及ばし。脂を剥て髄を推めのハ。その亡家の如し。設夫絲毫の利にあって。その汚を厭ざるハ。所謂糞中の虫なり。戦國のとれ良賎貪肙と孟子利を捨て。仁義を説しハ賢かれ天の時ハ地の利にしかず地の利ハ人の和にしかずと人を和するハ徳にあり。兵軍旅のなすのみならず。商人の店を開くに。縦地の利をえたりとも人の和なくハ繁昌せず。道ならぬ利を貪て。

一旦家を肥すとも。忽地命終るときハ。墳墓の土も乾ぬ隙に其名ハ朽てきえうするものなり。齊の景公馬千駟あり。死するの日民徳として稱するなし。伯夷叔齊ハ首陽の下に餓れども。民今に至て是を稱す。浅ましや。貪婪の人富を謀て利の為に。寝食を忘れ慈悲をしらず。是等を訳ぜバ人倫の大道をしらずして造悪の罪をます。飽まで食ひあきてゐるに飢れとも。錢ぞる不利を蓄てその志の貪を曉らず。是れかし餓て死するとも。その貪婪の鬼となるのみ。と格子を敲て罵れバ。内より障子をさらりと開て客人さぞ寒くもあらめ。物しくおんなさるならば。このわりの人といへを。驚れたるやうに見るくまつこの家のあるじと見えて人品骨柄いやしからず。嶋綢を二ッ裁桟留裏なる水豹の裘。いづれもさへぜ掛なして草の帯をしめ。夢想兵衛ハ

情ある。主人の云給ふ詞をるるとく。向井の戸を推ひ紀州流より
みづからあれい。小厮二人出て。客中を誘ひ且くして廣蓋よ。衣裳一
襲を載てりて出るを見るとバ。慾海和尚ハ剥とる。ゐ衣裳をりけるとバ。
まことく驚られるのごとく。見るを被て。舊の如へ坐る。行ふ小厮亦給仕
して。飯を食し。中酒ハ吸物を勧。盃を勧む。飯ハ一汁五菜ふ
まて。最も食ハ魚ハ多く見るとバ。いまだその意を曉ずして。ちろふ
怪こつて。物問ひけるとバ。絶まぞうち食て。たゞめてこれハ
そのとき主人ハ出て。義兵衛ハ對ひ。それぞれ。洞奥と呼て。この里ハ。
三世の春秋をおくるとき人ハ多くの見又祖の賜ふ。且
泰平の時ハ生るとあひ。ゐの幸福とぞんぜん。生平ハ神仏を崇め。
寿のよりも先祖を敬ハ。今胥ハ仏をあつて親戚朋友

を招くおるとバ。聊酒飯をあふ。実ハ一人を欺ハ。
さるふるつて。鄙ハ多く菩提所なる。瓜長寺の慾海和尚を招待ふ。
和尚四表八表の物語ふ。げにふるの多くのあり。彼日本人ハ
ゐるとあるバ。ゐの古撓袍をくゝ。ゐ者奴がいふるの憎けるとバ。
懲ふ。ふとく。首尾を説ふ。ふ驚られとぞん。ゐが来歴を
ふるふ。ふれとぞん。ゐ。ゐ曉ふ。ゐ國をいかめ。いく罵りの
こそ傷痛けるとゐ夫ゐ多ふ。ゐのゐ。梯の垢を去て見を挿。陽ハ入る
りのゐ。虱を拾ひ捨。布子を揮て見を被る。ゐハその身の情ゐ。ゐ拙ハ
稼されどゐの為ゐ。ゐ。ゐの志の情きとりて。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
て利を説て。慾海和尚を欺ふ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
彼と爭ひ。ゐ。ゐ。ゐ。和尚ハ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

取るべし。豆腐熟の聖なり。おん身は与へべき金を与へずして。剥ぎとる衣裳を被る。これ大慾の人なり。且もん殺めてその國より来て。只その小利を麦とる。吝嗇皺右衛門ホガ爲俸とんく。あざけ笑ひとりけり。良賈は深くかくして。顕ざれば売れを考へべし。小を見て利まで大をなすべし。これを笑ふは蜩と鷽鳩が。大鵬を笑ふ等し。夫大より富をいたすものは高利を貪らんとて紙ありてまたく富り。強利を求ふ吝嗇家と。誉をなすべて論じべかるべし。強欲は一金の益をもとめるもの。一倍の利を得ようとも。子母二合ようるとも。千万金の強を致すべし。足利二十分が一なるべれども。その益究めるべし。彼豆を植るもの。一斗植るとれば一斗の豆を取り。一斗植る時々。一石の豆をとる。取るもの多きをふかめべし。蒔く種の多けきべし。ろ[illegible]貨殖の道は一日も利を忘るべし。富て石崇よりもとなりとも。利を忘るゝとれば。その財春の日の氷のごとし。子思のいはく。道は一日も離るべし。離べきは道なるべし。貨殖の家は利をもつて道とす。年は豊凶あり。貸進は納不納あり。離るべし。離るゝ失ひ易れるものは利なり。もろもろ金銭。不足とは二つあり。淫酒をもつて。矯を放はせんとあり。今銭を欲といふものは。実は今銭を得れば。只今銭を水のごとく。きひ捨んと希ふのみ。かゝる白物百金紙なるとれば。二百金紙らるひ。千金紙なるとれば。万金紙とるべし。なりゆきとるれば。百金は手あり。これを失ひて。百金を借りて。別に百金を借りて。亦これを失ひて。なるれば。二百金を失ひ。千金紙なるとれば。万金紙とるべしといふ。本あるなり。千両の分散するものは。百姓の家なり。百両の分散するものは。十姓の本残なり。十を百を借り。千を百を配る。その是ざるをもつぬべし。この故に入を料

どして出をあのかれこをふらさで。亦彼蚕食貪利の徒ハ糠を食ひ垢を
舐り。理義を忘れて法度を犯し。その行ひ道ハ稱ざる也。貪りふぶと
いへども。富貴いさゝか是ハ炭を焼て炭團を造り。半紙の藁を貯て
残婚ハ絢煮豆を食べ。袖口かゝれるとく。飯ハ炊たぜて食ハ味噌ひ
えさりの科簡で一生疲跡をハるゝ。是も亦今残を欲とやふの心を
強て紙ちゝぶれが実ハ今残を欲といふ人ハあるゝれど。故蕩子我の徒ぶ
人の物を借て。返さるゝ比ハ。雲壤のたゞひあり。世ハ兄弟親友といへども。
その志を見れ。絶ハ愛想の竭るものハ。今残の上ハ妻子。彼故蕩子我の
為体を哭くふ。ぶ物他のものゝ差別なく。借りるを返さゞ。貸るをそゞ
めるとれハ飽まで飲食して。それとれハ連日食ハゞ。ものハ綿律を裹世
ものゝハ一枚のそゝふ事を缺るぶら。悔ゞ恥ゞそ。ものハ人ハ淆ゝんとする

類ハ。この國ハ絶てなり。人恒の産るれとれハ恒のところなり。業をなむ
ものハ栄業ハ怠るものハ亡ぶ。人間の百楽ハ財を聚るふもゝものあゝぶ。
富ハ人の欲とる所。貧ハ人の憎むところ。人貧窮なるとれハ不良乃
心を発をとあるゞど。富で不良の心を發さるものハ少し。して寡
慾なれば。是を清貧と稱を。これハ世を捨るふあゝぶ。世を
捨ゝ是て僅ハ一分を成るのゝ。これが死後の名ハ生前の富ハ比べ。神
仏の利益も今残の利益ハ比べ。この友ハ君子も残を忘れて。
是を孔兄と稱を。哭ゞ晋の膏囊が神銭論ハ釈迦ゝる王
兄のゞ。字ハ孔方とハ。これを失ハとれハ貧弱。是を得るとれハ
富強。翼なくして飛び足なくして走る。厳毅之顔を解。離發之口を開
残妻きりのハ前ハ夏。残ぬきりのハ後ハ愛。待ハ云。哥矣富人。

おびのちょうろそえんかひと
かちてさいろう蔵そて牛のうちもの
大うちでざろうをえんかれひと
今のでんきとう人
今のじろくまるなる
動きばくのちょうぞう

哀此茕獨。豈是をいふ扶幾のるする泉なり。百姓日よ用ひて。
その源尽ざ。遠とて往ざるとなく。深とて至ざるとなく。京邑の
衣冠も。疲労の講肆も。情欲を哭くとを厭ひ。ことを對ふれば睡寐
我家兄をえんとば。驚て視ざるとなり。されば幾の祐る所吉とて
利あらざるとなり。何くるとばも書を読で。もろくして後よ富貴なん。
幾ハ空よ神物なるなり。位なくして貴なる。勢ひなくして熱ひ。朱門よ
排くて紫闥ふ入り。幾のある所危とも安くとめ死とるとも活くめ。幾の
去る所貴とも賤くとめ。生るとも殺さむ。この有よ念諍辯論も幾
ふあらざれば勝ざ。孤弱幽滞も。幾よあらざれば拔ざ。怨仇嫌恨も。
幾よあらざれば解ざ。今問笑談も。幾よあらざれば発らざ。鍼よいと
幾ハ耳なくて安べ。幾ある所ハ鬼を使ふ。死て人を弔。子夏が云。死

生命ふあり。富貴天よあり。吾以くふ死生命なく。富貴幾ふあり。何とりて
これを明をとるふば。幾いくて禍を猜じて福とて。敗よ因て成とあり危き
ものも安く。死とるものも生るるを況とる。性命の長短。相禄の貴賤
も。幾ふあり。天なんぞ与ふん。天も短き所あり。幾も長き所あり。四時の
行ざ。万物の生ざるとハ。幾も天よ及ばず。窮達閑塞貧を賑つ。
之を倚ハ天。天も幾ふ及ばず。臧武仲が智。卞荘子が勇。冉求が藝
のごとき文をとりて人とるものハ。今の人とるものハ。唯孔方
のみ。その大畧なり。幾ハ誠よ可ものく。愛とくく。事なくく。使ふべく
ず。もるふ幾なるものハ。ふを突バ富なるものハ。その心ハ。ととこれ僻で且
妬るなり。情貧の人といふとも。幾なるとハ。一日も生ざ。世よ日本を神
國とて。天竺を仏國とて。唐山を儒國とて。日本神國なりといふとも。皆

もぐ〳〵祈るなんや。天竺仏國なりといふとも。仏のこころなんや。唐山儒國なりといふとも。儒者のこころなんや。もしもバこゝ國を貪婪といふもこれよりおなじ。貪る人のこゝろあらんハ。只利よりなくしてなりの。他國より猶まし。と言舌爽ふ利害を竭して說諭せど。爰想兵衛ハ嘆息し。主人ハ実よ利達の人之。富貴もその道をもつてせるとなハ。辞せずして只利ふ求て漠るゞ。君子ハせず。孟子齊よりとなる。齊王ハ黄金二百を餽まりもらるを受ず。宋よりおいて七十鎰を餽まバこれを受ず。それ百を受ずして。七十を受るのハ。豈利の爲なんや。かるゆえ云以取べし。以取ざるべし。取バ廉を傷る。以与ふべし。以与ざるべし。与ふまバ惠を傷る。亦聖人の言よ云道二ツ。仁と不仁とあり。夫利ハ禍のよる所。これをもて君子ハ利を說ず。命よ吉凶あり。事よ前後あり。求ずして至るを天福といふ。君子ハ天福を受て利を蘊ず。至ずして貧を成る。堯天下をもつて。舜よ讓まバ。舜ハ堯を受ず。季歴その國を軾まずして。太伯ハ国を受ず。舜の受るハ天福なり。太伯の受ざるハ天禍已よあらんバ。四海をもて万金の利よ比るとなハ。萬金鳴もなり。程。もろ〳〵よ命吉の人。もろ〳〵國中の金銭万ぐ一を聚るとなハ。こゝ〳〵富りとなる。殘るなりの。日〻よ求つゝ。その殘よ媚るをもつて。乞殘りて賢を狂ーめ。ゆえよもとめるーとなる。亦遂るなり。士ハ農の上よあり。農ハユの上よあり。ユハ商の上よあり。字殘の人ハ。亦その下よあり。かるゆえよ君子ハ耕せずして。名を重しとなるをもて。利の爲よ行ひと汚さず。漢の鄧通ハ蜀の銅山をもつて。ふつゝ殘を積よ道強よ餓て死し。晉の石崇ハ富貴世の耳目を驚りせしも。一朝罪せられて。刃の猜とのりぬ。善を楢ずして殘を積ず。道を失ずして富

小儈なるときハ。鄧通石崇と異なる事なかるべし。居今魯褒が。神銭論
を口実といへども。是魯褒ハ何の為に。神銭論を著したることをさとらバ。
彼人実に銭を悪し。利をむさぼるものゝ多かるを。千宝が捜神記に所謂青
蚨の子母銭の如きハ。九々八十一文にして利を誘ひとりて又是貪利の人を
識るのみ。これ当時の小説なり。されバ世俗の常言に。富をいそぐものハ。
三かくをかくとは。彼利の為に事を缺。亦恥を被義理を缺く。これを三
かくの富といへり。かゝる事を欠とれハ。富といへども貧し。恥をかき義理を
缺ハ賤しきのきはまりなり。抑我日本国ハ。士農工商ともに其分を守
て貪らざれバ。君子国ともいひ。且天神。これを開き給ひし故に。神道唯
一の上国なり。神ハ正直の人を護る。此国の如きハ。貪婪の人これを開き。
その利を今に伝へたり。しかれど貪婪国といひ。彼天竺を仏国と唱へ。唐山

を儒国と唱ふれども。ことごとく此国の人気を考ふるに。罰ハ重くして賞
ハ軽く利のために煩悩せられて。奴僕に恩なくして常にその不良を
責ざるが身の福とのみ希ひて。世の人の憂をしらバこそ。家に巨万の財を
積ども。子のなきを苦あり。夫天道ハ盈るを虧き。貨悖而入者ハ亦悖
而出。かし窮達の道銭にあらバ。尭ハ虞舜を畎畝に挙ず。孔子ハ顔
回を賢として誉べからず。徳ハ本なり。銭ハ末なり。本を外にし末を内に
するときハ危し。かゝる故に君子ハ利とあつて利とせず。義とあつて利
とすといへり。曩に是銭ありとて法師の救ひを求しハ。生を貪り死を
おそるゝにあらバ。彼いかで難に楽じてその利を望む。これ恩とする所なし。
しかれどもこれ又利をめでて彼に戯るものを。彼そびかふその非を悔ひ恥て
衣裳を返せしといへるで。無欲の人といはん。されバ仁をもて人を救ふときハ

人その恩を感せざるといふ事なし。利よろこんで人を救ふとなれば人これを
恵とせざる。譬へば人の爲に稲を刈りの。その穂をこぎて藁をくさべ。熟ら
ゐを飲むべき。人の爲に畔を造るりの。ひぐ田へ水を引くとあらべ。熟ら
これを労ふべき。残あるかの人の火急を救ふが如きもこれに似たり。その利の爲
ふるこれは。稲を刈て藁をくさべ畔を造りて水を潤ふるに何ぞ異なる
んと。席をうつて説破まべ。洞臭呵々とうち笑ひ。子貢は貨殖をなて。
孔子に噴らるる。范蠡は至る所ごとに富り。子貢范蠡の才あるとも。
利を捨てよく貨殖せんや。我人の火急を救へば。彼亦これに報ふに。残を
もてこれを返す。り一人の爲に稲を刈とれば。一斛の粟あるて。その一斛を取
らんは。熟らこれを飲バ。ぎりん。人の爲に畔を造るりの。百斛の水をもて
て一斗の水をひぐ田へ引くば。熟らこれを労ハざるん。利ハ金銭乃融通

する所。譬へば車の輪のごとし。貧きものは富里に来る。その蔭を蒙ん
ことを希ひ。富人は貧地へ来るべ。その里ごとに題て。貧福は影と
形のごとし。影は形に隨て動くものの。形は影に隨て動くことなし。ん
ぞ弁は新なるべ。これは形なり。ひぐ言に隨ふべ。とふぐきて答れば。義
士兵衛ものいふ。子貢が独范蠡が富のごとく。財を聚めてこれ
を散ずる。なる方に。子貢が里に貧きものなく。范蠡が子孫財用
に足る。この國人は多くべ。財を積ども散ずるとなく。馬援が所謂
守銭の虜こそ。ものなり。一家は富といふ。郷黨は寒く。一分銭を
積といふ。親族は餓ふ。といへども。洞臭忽地気色変て。
女ひぐ好意にて。剥ぎとる衣裳あるつれ。ひぐ飯を食ひ。ひぐ
酒を飲む腹のごとし。さまざまの廣言吐て惑さんとす。実に和國

の爽を作るゝ。誰ゝある。者奴追ひ出せと罵るべゝ。けるゝと同答して。大の男二三人次の間より走り出六尺棒を閃して打ゝふさえと競ひれば。麦太兵衛は大きゝ怖ゝと牙を跳らして走り出足を信して逃るゝ程よその日も既ゝくれぬ。宿ゝ人もあゝざれば。今宵は豪宿と思ひ定めて。森ゝの種をゝそふ内。月を燈ゝ四五十町。ゝつらんと忍び天結陰て。道いと晴く。左手右手の叢ゝ。燐火隠ゝとりえゝ。煙のごゝ人彩ゝるを。あゝや。と見ゝべゝの世の人ゝあゝざりけり。或は庫の縫とゝち。或は千両箱を引ゝえゝ。ゝゝ金ゝと呼ぶ声の。ゝゝはゝれてゝりの凄ゝく。牙の色いよゝぶゝて。二目とも見ゝぶゝうはゝおゝぶえねど。そも捨ゝる牙ゝるゝとゝゝゝく呉を踏ゝめて。左右をぶゝと眺つゝ。汝は曽家の一公欲生る日は牟利の奴とゝりて。仇の先へ火を吹ゝ。死して使

狼の鬼とゝりて。煙の中ゝ形をあゝはゝ人生まれて静ゝるゝは。天の性ゝ物ゝ感じて動くゝ。性の慾ゝる。その形ゝめるをゝりて慾ゝ。死して何の慾ゝあゝん。真の幽霊ゝゝもゝゝ。狐狸の形ゝるゝゝて。本の形をゝはゝゝ。生皮剥んと罵るべゝ。怨ゝ呉けゝくゝとゝゝ笑ひ。思ゝる玉紙ゝ人ゝる。人の命絶ゝて。皮肉ゝて。朽も腐もゝれ。惜ゝ呉れの怨念は。骨と共ゝ朽ゝるとも。夫愛情のゝゝは。賢愚ゝゝ。子夏は子を死して明を失ひ。石雄恋慕して。風を発ゝ。亦日の本の恵心僧都は常ゝ西方極楽の。蓮花臺ゝ生ゝん。と願ひゝゝべゝ。迚化のとゝ火葬ゝるゝ。胸膈の中ゝ蓮花ゝ。亦唐山の一女子。常ゝ山水と墨ゝ。死ゝる後その胸骨を見ゝべ山水のゝゝ。刻ゝるゝゝと博物の物論をゝ。私ゝても宜ゝとゝ。されば吾俤は金殿ゝ墨情ゝゝれば。猶中数万

の金銭あり。その怨念のなかるべきか。両の夜風の夕べ、幻よあらわれて、
ひぶ金くれと呼ぶぞし。凡慾は有用のるあ為くして、空盃の殤は厚き
ものゝ。こゝ人情の常とする所死をするものは金銭を用ゐ、ものゝ
これを惜しむ。惜しむ忘れ、死は孟の慾あり。されば世にある人も、貴き
親族を救ひ、郷黨を賑し、先祖の墳墓を再建、子どもの為に善
師を擇び、家の破損を修覆するんど、有用の所為なれば、金銭を惜む。
溺酒に耽り、衣裳に美を尽し、拉山戯水に日を費し、媚を浮屠家
に求め、子どもに絲竹艶曲をならはしむるんどは、孟の所為なれば、
金銭を惜むべき人物世界にあるまじ。困窮止ことをえざるべし。その空盃の費によりて、
拉民妻子を艱めるものは、泰平の餘沢にして、彼が空盃の費を欲く。

ひぶ有用の用に死ん所謂塘をうして水を落せば下流の人これを汲ぶ
如し。彼春の木の一朶数百花なるも、果は十が二三にすぎず。花を愛盃
なる者は多く、果は有用なるものなれば少し。且その花を愛して、その花を惜
むものは豈果を食ふ為ならんや。君それこれをもりく亦各嗇に二つあり。
貸さざる借ざる。衣食をおしむて銭を積み、己を固くして人と交らざるを孤陋
といふ。借て返さず、衣食に窮して、己をうごかして、銭を裏るを奸
曲といふ。かゝる者に云積銭の家あり餘慶あり。借金の家あり餘殃あり。
君今奸曲を措て、貪婪を責るとこれは天の悞をうべくして、その子の不
孝をまちがるべし。生理学をうけて世情に情ならんとす。祝能が
佞を学び、宋朝が吳に扮して、蔭を此國に蒙りのく、富家あり瘦
拘る。ならべ大木の蔭、苦死浮世の雨を避んと草の原なる

長物結ふ。夢想兵衛ハ声を激し。遂ゝ怨霊ども。賢者乃
その子を悲して両眼盲目女その夫を慕ふて風伯となりしとか。皆
至誠のいたす所爭念残ふ愛惜ふる。是夫是婦と笑ひくん。楚
書ふいハどや。楚国ふハりつて宝とする。惟是をもつて宝とす汝
り。一善ふたゝむとをよくもちゝべ。万金ふも愛惜せず。且孟の費
をもつて。有用の用ふ宛るべしハ。呉客が不亀手の薬ふあるゞ。
これハ財の罪ふあゝべ。呉人の賢ふあり。ゝぶ公田ふ両ふゝどん。ゝぶ
私ふハ及ゝゞ。吝嗇ハ慾の害ふあり。放蕩も亦慾の害ふあり。入と
出ずとふ呉るのゝ。その吝ハ異ふるとする。この故ふ世俗の常言ふ頃
城買の糠味噌汁とゝ入ふあり。凡淫酒をもつて財を惜ざる者
も。その志ハふゝべ賤し。邪曲奸悪ハ論ずるふ足らべ。世ふ吝嗇と

倹約をひとつふあゝべえゝふりのあり。殊ふ紙ふ足ども散ゝとする紙ふ足ども。
貪て施とをおりハど。恥をもゝべ。銭をもりハど。利ふよつて行ひを汚
すものハ吝嗇ふり。衣食を薄くして非常ふ倹へ費を省きて狂服
の貧きものを救ひ褒ふバ散ゝし。徐ふ足バ施し。恵ども施らべ与
ざれども然ども足と倹約とハ。貧困ふハ倹約の人ふり。今残ハ
国の宝ふり。天且くふれふ貸をとも。長くゝぶ物ふあゝべ。今日入るる
あれば明日ふるゝべ出るとあり。その融通ふる人の呼吸のごとく財
且くゝその家ふそなるハ。人ふ息の長きふり。財頗ふ生くゝ留ゝざるハ。
生る息の長きふ人の呼吸ハ昼夜止とする。今残の融通亦ゝのゝど
何ぞ久くゝゝ家の系留ゝん。その富ふ人ふ及ぶ。その子ふ
貧きふの多し。先祖の徐徳ふよつて子孫その富を積りのあり

むさくひろう

ともいまだ百世に芳流さするものと見えざれバ萬利ハ一名にたらんば。
富ハ屋を潤し。徳ハ身を潤す。その損益ハ利と名とのミ痛ましきハ汝ホ
この理を曉らずて。今残に愛惜して遂に貪鬼となりぬ北條九代執
權たりしも。泰時の寡慾なるゆゑ。足利十三代武将たりしも尊氏の
ものを志あらざるゆゑなり。人寡慾なるときハ。百拙を補ふべし。富
ハ天命の攸なるところなりけれバ。この両将ハ。別に称すべきなりしぞ
寡慾なるゆゑにかくのごとし。さとしくと説示せバ。怨霊これを嘆息あへ
ず。小賢や。汝利を捨て名を称すと。名のくさりなるもののぞかし。利
を捨て汝がごとくなるべ。孰かそれに与すべき。ぞいひうち殺して吾業が懸針
ふせんと。辟立て或ハ朽たる卒都婆を引抜き。或ハ枯木の枝をへし折て振上
兵衛を打およす。五體凝して声さえらず。吐嗟この野の露と消え

消なんとする。一道の光り。東の方より紫雲たなびき光明赫奕として。
四方を照せバ。今まで有つる怨霊どもハ。消ごとく失にけり。夢想兵衛ハ
物ふれにうたれて身を起し。あたりを見れバ奇なるかな。雲ハたちまちにひさがり
て地を去るの高さ六尺ばかり。童顔仙骨長髯白眉の翁忽然と雲の中に
立ちたれバ。夢想兵衛これを見て膝を屈め。臥て低頭神仙これを救ひ給へ。救ひ
給へと叫びけり。その時仙翁莞尔とうち笑ミ直言の人ぞ。ふかく怪むなと
おのれハ名利の徒に嫌れて。正真の福の神なり。近曽この地へ現
化して百家の童子にのりうつり。貪利の害を示さとけども。凡人さらに
信仰せず。ぜひなくその土を去らんとて雲に閉り飛去らんとせしかど。ぬしが誰
俗をさとしてぶらく小戻しつらんハ同憂を相憐むの老婆心なし。ぬしが懸針の浦
嶋に由縁ある和郎なれバ。外のこともしりつねべし。おのれが手を結でもかくねこの

國にぬしが才でハ及ばなく。諫言ハ耳に逆ひ。良薬ハ口に苦し。人の不吉を責るときハ。後の患をいかせんとハ孟子の斜致。されバ彼大賢さへもはゞかる道を速にハゆかれど。齊の宣王に説しときハ。宣王これをさへぎつて。寡人貨を好むといへバ。貨によつて道を説き。色をこのむといへバ。色によつて説かれけれど。それぞれ迂遠といはれ。おもやこのみも聴ざりし。徳子が膏薬を夏賣るやうなりと不埒にさとる。昔も今も人情に。えんとおろかさまハなし。おしが釈方老子どもが。不吉人ハ吉人の。たすけなきとはいふまでもなし。貪婪國の人ざや。その取る所のものでハなし。放蕩國や好曲國に比ぶれバ。その益あるに似たれども。貪るとの甚しければ。好曲國と縁を結び。小利大損の患あり。深山に貨あり。貨によるなれもの道をゆるまもひ。悪人罪なし。玉を抱て罪ありとハ。おしが宗旨の妙文句。ぞのかいとのまをぜみて貪る心の

ふらのものハ。天道が大金銭をうけさせなんぞ。人されにてを出さべ。金をたくばへよ。これぞハよしと捨て取ざれば。己と潔正直にしてゐるものにの富をおとしのふが天の配剤。貨に心なきものハ。其慾なきに天道が必ハぬ貨を授るべ。慾なるもいらぬものの不義の財を貪るな。玉を抱バ罪ありと。身に應ぜぬ望ぞやめし。その語が腹へおさまれバ一生よそ受るなれど。飲ねバ薬も功能なし。されバ富も貧きも面々のこゝろにありて。金銭のうへにハあらず。真の福といふものハ。道をまもりて足ことをしつて。その外を願ず。徳を脩て業をつとめ。善を択て尊敬すれバ。妻子和合して不孝の子もなく。親戚和睦して不義の奴僕なく。人その善を称し。友その愆を告るときハ。人間の富貴極まれり。この上にまさる是貴人といふ人。その善を稱ずる是ハ讒言なるべし。友その愆を告る

これハ改るに便あり。賓主相對して夜話するに。官をいハず。利を濫ず。采緩を問ず。艶曲を奏せバ。人の短所を責ず。己が長きを説ず。学不圖の為に益あらんことを先にして多く聞てふかく学ぶを久しくし。これハ惑ず。聞を多けれど忘れず。草野にありて衣冠の古実を辨ず。壮年にして千古の得失に通じ。一夜の清談。百世の亀鑑ともなることあらバ。人間の歓樂極まり。既にその志富て歓楽彊りなからんにハ。孰かその外を求めん。陸象山が格言に。貴きハ聖賢なるより貴きハなし。富ハ道徳を畜ふより富るハなし。貧きハ道を聞ざるより貧きハなし。賤きハ恥をしらざるより賤きハなし。といへり。されバ貪婪の人。富貴とする所ハ君子これを貧賤とし。貪婪の人貧賤とする所ハ君子これを富貴とす。世に七福神とて祭るを見よ。福禄寿老ハ。南

極星なり。布袋ハ明州奉化縣の弱法師。すなハち弥勒の化身と稱す。辨財天ハ。閻魔の長姉吉祥天女と一体なり。善人に福を毘沙門天ハ水徳の神。或ハ是を多聞天と稱す。この神の主る財宝ハ三千世界にありといへど。只善人にこれを授て。貪婪不善の人にハ授けず。されバ善人なける者にハ財あまりてありてあまし。毎日須弥山三ツほど。これを積て焼捨なりと。簠簋内傳の注にいへり。夷大黒の説ハ一定ならねど。その福神とする所以ハ。ものゝ異なるべきもあらバ。しられよ。凡夫ハ福の福たるよしをしらバ。慾を恣にして一生の行ひなれも。この神によらで佞媚るべく。金銭を授からんとかく。不報の福を祈るこそ惑ひの上への惑ひなれ。宝とハ。金銭のみのをいふならバ。子なれものも。陰徳を積ときハ。孝順の子宝をさづかる。才なきものも習ひ

学ぶべきは情を鞏慾を禁め。悪をとるべきは。身の宝とする。今う生まれつく古を考へるは。心の宝なり。師に従て道を学ぶは。耳の宝なり。字を清て経史を読は。目の宝なり。身の臭を沢まして。煩悩の垢を去るは。鼻の貨なり。言を慎て禍を脱るは。口の宝なり。書法に熟して。四方の需に應ずるは。手の宝なり。病みて。萬里に往来するは。足の宝なり。徳を備て。庭の刻を送るは。子孫の宝とされば福は業を勤るにあり。壽は身を有つにあり。これは是天の人と守る所なり。正真の福の神なり。凡夫の信ずる。慾の神あはれ。舜も畎畝の中に生まれて。富四海をとるに。孔子は宋魯の名家にて。東西南北どころ。その位を得ずして。人力の及べきにあらざるとは。人力の及べきにあらざるべし。悲しむべし。貪婪の國

人。ろう神祀を学て。狐狸の妖言を。下士道を学べば。かるべし笑へ。笑ぶれば。ものって道とする。是ろう神威のあるべき所以。況て仏が論ずる所は。是非相半せり。その身聖賢にあらずして。聖賢の口まねを。又危ふきを。夜も深し。且く中庸人て。蘇枋保の。小横一ッを投与へ。忽ちて花土ろうの人。夢想兵衛は忙然と。ちぢ〳〵そのことを伏拝を。草を裾に小横をうち殺て。とろ〳〵と目睡べ。その夜はいろ〳〵の明ろう。横に求食るの声。驚き覚て岸破と起きべ。がさ〳〵と音するを。何ぞと見べ。福の神の授ものは小横ふあるでいる頃を。慾國にくべ。ろう夫は。紙老婆ろう。ろに至るまれ。驚きそは彼福の神も。赤色薄嶋仙人みく。賢ぶって口利ると。戒めてこの紙を書ふ。いよ〳〵

孤行を励まし給へ欲あり給ふ。有ぐ不。と感涙頻に紙老眼の。
羽をぬぐ〳〵その中に。安らうと案じべ寺と如く紙鳶は木の梢の
間に上り。おのづから空中に閃きのぼりて立地に雲の中にぞ入
ぬけれ。

○揔評

慾は七情の主なり。苟も利を先ずるときは。奪ざれば飽ぞ。夫利
と害とは相郷し。人その一分を安くせざるを困窮といふ。その一分を
安くするを富貴といふ。足るを知れば富足をもとめざれば窮を。
周公の才の美あるとも。驕り且吝るゝ時は。何ぞ義を
捨て利を取ぶを易ふ云。乾元亨利貞とのり。利は義と訓害は
そこなふと訓り。その利のよろしきを以てこれをそこなふものは慾なり。人

は萬物の霊にして。その智万物に長ず。上智は利を捨て害を退け邪
智は利を蘊て相害を貪富は天のなりと示その道をもつてなるときは。
利あつて遂に害なし。鳥鵲燕雀のごとき寡慾なる故に利を薄くし
て分を守るものゝ。彼数百の烏。叢林の中に集り。朝に出て東西南
北をその毎日に求食とこゝろ。必方あり。常に南方に求食烏のり
食を東方に求るときは。その地の烏ども責て。終日食を獲ざるべ
といふ。その烏中。反哺の孝あり。久〳〵大人君子に稱せらるゝ。
その智の足らざるが故に。吾を捨て善をもとめ。浄けきを
厭ひ。或は小鳥を追ひ。蟬を捕。或は死人の腸を食ひ。牛馬の斃
をもとめ。聚ふ。吾行あるとども。異類を傷ひ。浄けきども。汚きを
厭ざるは。人の性の吾なるも一挙して教るときは。烏鵲に

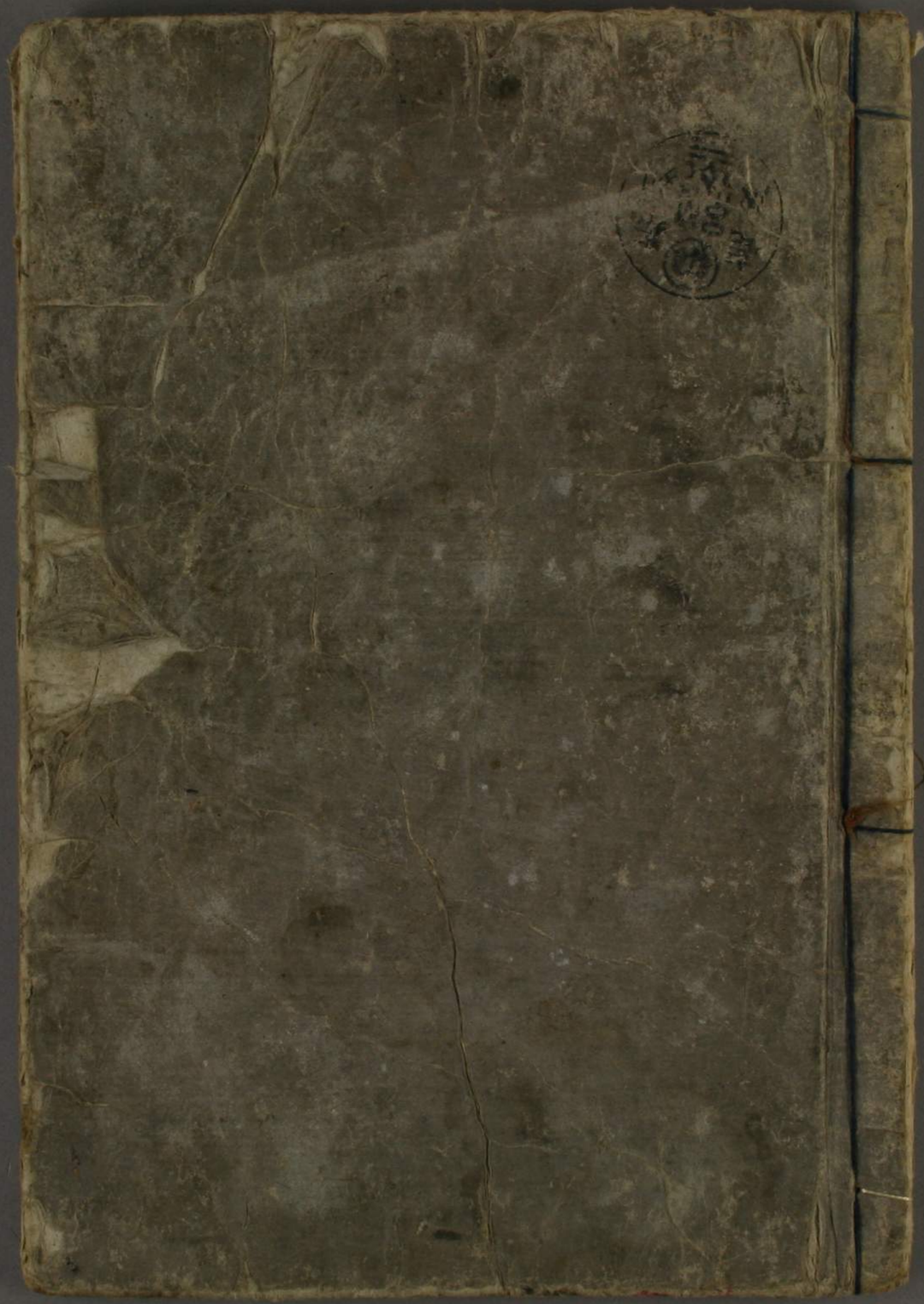
及ざるとあり。烏は分を安くして母に孝あり。貪婪の人稼を厭ぜ。
残忍の人忠孝をもつぱら亦彼燕雀の智は烏鵲の下にあり。一花
半朝。多く覆車の粟を拾ひその腹を満るとあんべ。偖おもて
亦外を求めど。その穂を啄とれ。一トとび啄めば一トとび仰ぎ左
右顧みるべし。利の為に害を忘れど人は動もれば利を
よつて害を忘る。況て燕雀ふぜも及ばざるとあり。人として情を
禁め。慾を割ことをゝべざるべし。道を安ずるの惑なるべし。譬ばゝ樓閣成
て燕雀相賀とも。その分をもて亦その亦を以て相ゝ
亦鵲は年の秋巣を造る。大乙に向て大業を背ふ。明年
大風あるべきを知りて。その巣を低くす。彼その風信をもるべ
ハ人の及ばざる亦なり。もれども。その巣の低きを以て雛を童子に

獲らるゝをもつて。奸智の人又これを似たり。伎倆枝計。君子
も欺くべし。もれども。その利の為に害あるを知らば。もつて
りてこれを捨てば。利と害とは相去ること遠し。富貴も亦道
をもつて得ざるんは。辞をべきなり。貧賤も亦命をもれとも
恥るに足らず。只その分をもるとれは安く。貪るとれは危し。おゝ
恭く世の童子に告。聖賢の言は載て経史にあり。もれども。
或は口まさこれを読ども。或は読ども。その義を解せるに至らざれば。所
謂馬耳の東風なるべし。その友に先哲を和解して国字に写し。亦
淡解してその義を明を今はおいて徐師の書を多くして更に
愚が言を待ずとも。信言矣るべきなり。母読に飽て巻を
蓋するものもあるべし。この書のごとは荒唐にして

却聖諦をあげて。途に続の罪をまと。只戯謔をもてあそぶ。虚をあざるの微意。仏者の用ひりつて。己を責るふあり。且終ぶる所の四国の光景。そぶめかい色を減め。中ハ闘を減め。後ハ沼を減む。童子ホころよころせよ。続で孟子といふとも。小補ありハまぐらぞ。仏者ハ誦念仏あり。亦唄頌目あり。且征鼓をりつてこれを囃と。その上戯謔ハ仏にれども。冥福を祈る功徳ハ一なり。戯謔もこひまり出づ。彼豈戯るゝんや。彼豈戯るゝんや。

夢想兵衛胡蝶物語巻之五終

東都書肆寶聚堂　両國米澤町三丁目　金屋又兵衛

繪本排間録　前後十二巻
嫩髻蛇物語　松亭金水作　前後十巻
曾呂利狂歌噺　前後六巻
志道軒蝴蝶物語　風來山人作　全三巻
擁書漫筆　與清作　全四巻
嫩髻蛇物語　辺月亭出一ヤト　三編五巻

鹿沼